

朗読・群読に適した教材

朗読に適した教材として

今回の実践では、古典教材のうち『徒然草』「神無月のころ」を朗読のための教材として選びました。『徒然草』だから朗読を取り入れたというよりは、他教材との比較において朗読に適しているものは、という観点から選んだものです。

したがって、朗読に最適だとは考えてはいません。なぜなら文種が随筆だからです。ただし、一人の生徒が読むにはちょうどいい分量です。また、随筆といってもストーリーがあり、作者の言いたいことが明白で分かりやすいため、大きな声で読むという学習目標には適していると考えられます。音読でもかまいませんが、群読につなげることを考えると、やはり朗読にしてよかったと考えます。

群読に適した教材として

グループ群読の導入として、今回は『枕草子』「春はあけぼの」を選びました。この作品には音声化するのに適したリズムがあります。よく暗唱される教材でもあります。また、内容が思想的ではなく叙情的です。表現が説明的であるよりは描写的です。そこから、その場の情景を思い描くことができる作品となっています。

ただし、群読といっても30人から40人でやるべき作品ではありません。心情の変化や情景の変化が激しいわけではなく、特に声量を必要とする部分もありません。したがって、6人から7人で群読をするのが適当だと思われます。

今回群読のために取り上げた『夕焼け』は詩です。詩は、もともとその叙事的、叙情的な内容から群読には向いていると言われています。

『夕焼け』はどうでしょうか。この詩の構成は、大きく2つに分けられます。前半部は電車の車内の叙事的な内容、後半部は電車を降りてからの話し手の思いを述べた叙情的な内容です。使用する語句はくり返しの表現が多く、内容の上でもリズムの上でも盛り上がりを際立たせています。また、表現技法として倒置法や漸層法も使用されています。したがって、声を積み重ね、響かせるのに適していると言えます。

話し手である僕、娘、若者、3人のとしより、車内の乗客といった目が設定され、さらに後半部では、僕は電車を降りたとあるように、娘に向いていた目は電車の外へ移動していきます。これらの要素から群読に適していると考えました。

群読は、劇作家の木下順二氏が『平家物語』を原文のまま現代人に伝えるにはどうしたらよいかと考えているところから生み出された朗読の一手法です。したがって、古典から群読に入るのは理にかなっています。中でも『平家物語』は最適です。

できれば、一人で読むところや群で読むところが出てくる場面を選びたいところですが、その点「扇的」は最適であると言えます。また、個人朗読、グループ群読と積み上げてきた学習の総決算として、あるいは学級が一つになり、全員でつくり上げる感動的な授業をめざすというねらいから考えても適しているのではないのでしょうか。